

2017年度
資本主義経済入門II
第9講

東北学院大学経済学部
泉 正樹

第III篇 機構論

利潤と生産価格について(1)

テキスト181～190頁

2

第III篇を聴く際のポイント

- ・ 第I篇「流通論」では
第II篇「生産論」では
を考えた
- ・ 第III篇「機構論」では、
との関連をさらに考えていくことになる
✓その際の出発点は、
➢ 第I篇「流通論」のときと同じように、個別主体の観点に
立って、資本主義の中を歩き回ってみよう

3

概要

- ・出発点(個別産業資本)
- ・生産と流通
- ・費用価格と流通費用
- ・利潤率 再び…
- ・個別産業資本の競争

4

今回の問題関心

- ・自己増殖する価値の運動体(資本)の内部構造を見てみよう
- ・資本の 値段について考えてみよう
- ・より効率的な価値増殖を目指して資本が参照する基準について考えてみよう
- ・個別資本が行う競争の意図せざる結果を追跡してみよう

5

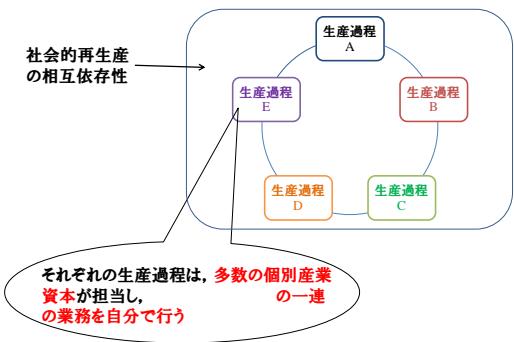
出発点(個別産業資本)

- ・第III篇の出発点は といわれるけれど…

「社会的再生産は、さまざまな生産過程の連鎖で構成されている。このような各生産過程をそれぞれ多数の資本が担っている状態を想定する。この資本を個別産業資本とぶ。個別産業資本は、社会的再生産を構成する何らかの生産過程を、必ずその運動の一局面に含み、一種類の商品を生産し自ら販売する。この個別産業資本の内部構造を明確に理解することが出発点となる。」(テキスト183頁)

➤ にある社会的再生産を、多数の資本が担当し、かつ、生産から販売までを行っている状態が出発点

7



8

生産と流通

・ 個別産業資本の内部構造を実際に調べてみよう

「個別産業資本の運動には、ある期間がかかる。その期間は、生産期間と流通期間によって規定される。

生産期間という概念は、……自然過程の認識を基礎にした生産物に関する規定である。資本の生産期間というのは、その資本が生産する特定の生産物の生産期間という意味である。生産期間には、生産技術に応じて一定の基準が存在する。……

資本の運動のなかで、生産された商品は販売され、その代価で次の生産の原材料や労働力が購買される。この期間を生産期間に対して、流通期間とよぶ。」(テキスト184頁)

✓ 流通期間に関して…

10

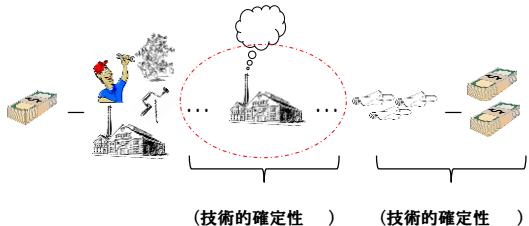
「流通期間は、形式的にいえば、販売期間と購買期間に分かれるが、この区別は意味がない。商品は『早く売ろう』と思っても、売り手の意志だけではどうにもならない。その意味で販売には、期間が『かかる』。ところが、購買のほうは『早く買おう』と思えば変える。期間が『かかる』のではなく意図的に『かけている』だけだ。資本の運動を制約する流通期間とは販売期間のことなのである。

資本の運動を規定する期間は、確定性をもつ生産期間と不確定な流通期間に二分される。」(テキスト183-4頁)

✓ 以前に考えた、
い、という点をもう一度思い出しておこう

11

- ・ 簡単化のために、出発点と終点に貨幣を置いて、個別産業資本の を模式化してみると…

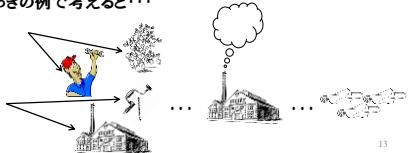


✓ まず、個別産業資本の生産過程の内部を見てみよう

12

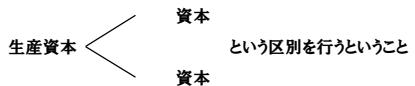
「生産過程ではさまざまな生産手段が用いられ、それに応じて一定量の労働力が必要となる。生産過程に投下された資本を生産資本といふ。生産資本のうちには、原材料など、生産物1単位ごとに使いきられる部分もあれば、機械装置のように多数の生産物の生産に使いつけられる部分もある。……両者の区別は難しいが、ここでは、生産資本のうち、一生产期間を基準にその間に使いきられる部分を流动資本、それをこえて使われる部分を固定資本とする（生産資本＝流动資本+固定資本）。労働力の購買にあたられる部分も、通常、流动資本に含まれる。」（テキスト184頁）

✓ さっきの例で考えると…

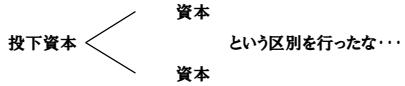


13

- ・ **ナントカ資本**という用語がぼちぼち多用されることになるので、混乱しないように注意しておこう！
✓ 今の話は…、**一生産期間中の使われ方**という観点から、



✓ という観点からは…



では、流動資本であり、かつ可変資本に分類されるのは、資本のうちのどの部分でしょうか？

14

- ・ 続いて、個別産業資本の
を見てみよう！



「流通過程が存在するため、そこにも資本の投下がなされなくてはならない。流通過程に投下されている資本を流通資本とよぶ。生産物は、販売されるまで商品の形態をとり、売れれば貨幣の形態をとる。流通資本の基本は、商品在庫と貨幣準備である。前者を商品資本、後者を貨幣資本とよぶ(流通資本は二商品資本+貨幣資本)。」(テキスト184頁)

16

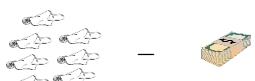
- #### ・不確定な販売期間について…

「販売期間が伸びれば、流通資本のうち、商品在庫の占める比率が高まり、逆に縮まれば準備金の比率が高まる。個別資本としては、流通資本の額をできるだけ抑え、生産資本にまわしたいのであるが、それを抑えこみすぎる、販売期間が延びたときには貨幣準備が底をつけ、固定資本が遊休する。偶然的に変動する販売期間に対して、どの程度のバッファを用意するのが適切かには、生産技術のような客観的な基準がない。それは過去の経験に照らし、現在の市況を睨んで、個別的に判断するほかないものである。」(テキスト185頁)

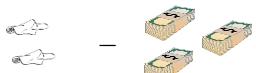
✓ いろいろなことが述べられており難しいですが…

16

- 流通資本の**価額**を一定(たとえば100万円)として、…
✓ 販売期間が伸びれば → 商品在庫()の比率が高まる



✓ 販売期間が縮まれば → 準備金()の比率が高まる



- ✓ 個別資本としては、できるだけ流通資本の価額を抑えこみたいといふのは、どうしたことだろう？

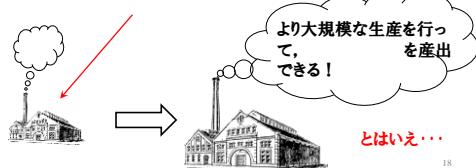
17

- もし、流通資本の価額を100万円から50万円に圧縮したとすれば…

✓ 圧縮後の流通資本は、

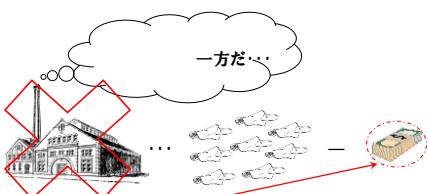


- ✓ 圧縮して浮いた50万円を生産資本化すれば…



- 販売期間が伸びてしまう(=)と、

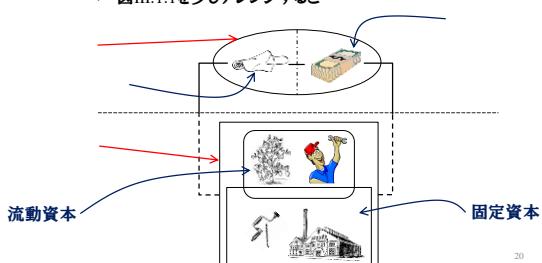
- 在庫が売れるまで手に入る で、次期の
生産を行うための が買えるのに…いつ
までたっても在庫が捌けないなら、生産をストップ
するよりほかにないな……



- ・以上のように、個別産業資本の内部を見てみると…

「個別産業資本は、生産と流通という二つの世界に棲息する。このため、個別産業資本の体内は、図III.1.1のような対極的な要素に分かれる。」(テキスト185頁)

✓ 図III-1-1を少しアレンジすると…



費用価格と流通費用

- 個別産業資本の内部は見てみたので…
- ✓ 続いて、個別産業資本の生産物(売り物)について考えてみよう

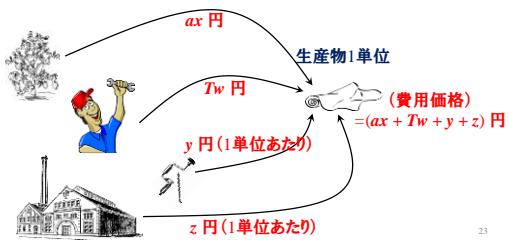
「資本の運動の中で支出される費用は、生産物1単位あたりに割り振ることのできる費用と、そうできない費用とに分かれる。生産過程では、もっとも合理的に生産したらだけのインプットが必要であるか、生産技術によって物量が規定できる。これらの物量に対して、基準となる価格が与えられれば、商品1単位を生産するために必要となる費用も見積もることができる。多数の生産物の生産に用いられる固定資本の価値も、1単位あたりに割り振られ、この費用に算入される。この費用をマルクス経済学では、伝統的に費用価格とよんできた。これは、製造原価と同義である。」(テキスト185-6頁)

22

- 実際の販売価格のうち、まず (費用価格)について述べられているようだ…

- ✓ ポイントは、ことのできる費用といわれている

▷ モノのととが与えられているとすれば…



23

- では、生産物1単位ごとに割り振ることが費用ってあるのだろうか？

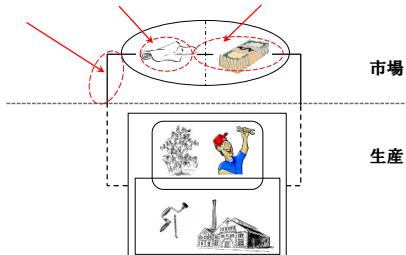
- ✓ をもたない費用ってあるのかな？

「流通過程の存在は、在庫や貨幣準備のかたちで資本投下を強いるだけではなく、流通費用の支出を要請する。ここでは、……技術的確定性を示す生産費としての費用価格に対して、それと異質な流通費用の性質が新たな問題になる。」

流通費用は、通常、生産過程との遠近関係によって、次の3種類に分けられる。(1)運輸費。商品の販売には、多くの場合、商品の輸送が必要となる。市場において有利な販売地点を求めて、商品を輸送するために要する費用である。(2)保管費。価値実現には流通期間がかかる。その間、品質を維持するために支出される費用である。(3)純粋な流通費用。商品販売のための費用である。会計処理などの経費のような消極的な費用から、市場調査費や宣伝費のような積極的な費用までを包括する。」(テキスト186頁)

24

- ・こんな感じかな？



25

- ・要するに……

「費用価格は、それに比例した生産量をもたらすのに対して、流通費用はすべて、販売量とは相対的に独立した支出額となる。流通費用はムダかどうかという以前に、そのことを判断する基準がない不確定な費用である。この点では、運輸費も保管費も、純粹な流通費用と区別はない。それらは、流通費用として一括され、売上総額から総額ベースで差し引くほかない費用である。」(テキスト188頁)

- ✓ 生産物1単位あたりの費用価格が x 円だとすれば、 $100x$ 円の費用価格を支出すると、
単位の生産物ができる…
- そうした100単位の生産物を販売するために、どれだけの流通費用がかかるか？ という問題は、
ない問題

26

利潤率 再び…

- ・前期に、資本の考察を行った際に見たことですが…

✓ テキスト188頁の以下の関係はもう一度確認しておこう！

$$\text{売上総額} = \text{販売価格} \times \text{販売量}$$

$$\text{費用価格総額} = \text{費用価格} \times \text{販売量}$$

$$\begin{array}{rcl} = & - \\ = & & \times \text{販売量} \end{array}$$

$$\text{純利潤} = \text{粗利潤} -$$

前期にやった「 」に相当

28

- 以上を前提に、個別産業資本に即して考えてみよう

「個別産業資本にとって、増殖の程度を示すのは、投下総資本に対する、一定期間の純利潤の比率である。これを純利潤率といふ。」(テキスト188頁)

$$\text{純利潤率 } r = \frac{\text{純利潤}}{\text{投下総資本}} = \frac{\text{粗利潤} - \text{流通費用}}{\text{固定資本} + \text{流動資本} + \text{流通資本}}$$

() + ↗

「投下総資本は、(1)生産過程に投下された流動資本と固定資本、すなわち生産資本のほかに、(2)流通過程に投下された貨幣準備と商品在庫、すなわち流通資本で構成される」(テキスト189頁)

29

- (1) 生産資本 と (2) 流通資本 について…

「(1)には生産技術の面からいって生産量との間に確定的な関係が認められる。これに対して(2)は、販売量という個別産業資本がコントロールできない、市場の無規律的な性格を反映し、偶然的に変動する。利潤に関しては、(1)粗利潤は生産技術的な関係を反映するのに対して、(2)純利潤は、流通費用という不確定な要因で個別的にバラツキを示す。純利潤率から、(2)の不確定要因を除去した利潤率を粗利潤率といふ。」(テキスト189頁)

$$\text{粗利潤率 } R = \frac{\text{売上総利益}}{+}$$

✓ 純利潤率(r)と粗利潤率(R)を考えてみたわけだけれど…

「純利潤率は、正の値をとる擾乱要因δによって粗利潤率の下方に乖離する。

$$r = R - \delta \quad (\text{ただし } \delta > 0)$$

30

個別産業資本の競争

- 個別産業資本の利潤率について見てきた

✓ できれば、より高い利潤率を実現したいものだ…

「個別産業資本は、純利潤率を相互に比較して、少しでも高いものがいればその行動を模倣してゆく。これが資本の競争である。それには二つの側面がある。」(テキスト190頁)

$$\text{純利潤率 } r = \frac{\text{純利潤}}{\text{投下総資本}} = \frac{\text{粗利潤} - \text{流通費用}}{\text{固定資本} + \text{流動資本} + \text{流通資本}}$$

を基準にして…

純利潤率 r_A 純利潤率 r_B

$r_A > r_B$ だな… より高い r_B を実現するため、ここは一つ、Aさんのやり方を真似するといふか



=

32

- ・ 資本の競争には、二つの側面があるといわれているけれど…

「 第1の競争は、部門内のもので、同じ商品を生産しながら、純利潤を粗利潤に近づけるかたちで展開される。両者の乖離とは、流通資本と流通費用の存在に由来する。しかし、これらは、個別資本にはいかんともしがたい流通期間の変動に対処するための資本投下と費用支出であり、模倣しても必ずしも同じ効果は得られない。流通資本は、固定資本の過剰を生まないような最低水準に、状況をみながら再調整することはできる。また流通費用のうち、とくに市場調査費や宣伝など、積極的な流通費用は、それをまったく支出しない場合に比べれば、販売期間をある程度、短縮する。ただ、その短縮の程度は、必ずしも支出額に比例するわけではないのである。」(テキスト190頁)

- ✓ また少し、ややこしいことがいわれているようだ…

33

- ・ 個別産業資本にとっての理想的な利潤率は、粗利潤率 R のだけれど…

- ✓ 実際には、流通過程が存在するため、個別産業資本の利潤率は、

$$\text{純利潤率 } r = \frac{\text{純利潤}}{\text{投下総資本}} = \frac{\text{粗利潤} - \text{固定資本} + \text{流動資本}}{\text{固定資本} + \text{流動資本} + \text{…}} \quad \text{というかたちで把握される…}$$

✓これを に近づけるには…

この部分ができるだけ
圧縮できれば…

$$= \frac{\text{売上総利益}}{\text{固定資本} + \text{流動資本}} \quad \text{に近づ…}$$

➤ とはいえ…

34

- ・ $R > r_A > r_B$ であるからといって、BさんがAさんの真似をして、流通資本や流通費用を圧縮しても、期待通りの純利潤率を実現できるとは限らない…

- ✓ まさに、「これは、個別資本にはいかんともしがたい流通期間の変動に対処するための資本投下と費用支出であり、模倣しても必ずしも同じ効果は得られない」というところだ

- さらに、市場調査や宣伝に費用をかける(=)と、早く売れるようになるかもしれないけれど…
- そうした費用をかけなければ必ず早く売れるようになるわけではない…
- ⊕ というこの意味を、しっかりと身に付けておこう

35

- ・ 資本の競争っていうのは、 でしか生じないものなのだろうか？

✓ 綿布を生産している部門と、鉄を生産している部門との間で競争って起こらないの？

「第2の競争は部門間のもので、現在生産している商品を別の種類の商品に変更するかたちで展開される。個別産業資本がその産業部門を変更することを資本移動という。全面的な資本移動は、固定資本の価値の回収が完了しないと実現できない。ただ、償却資金や利潤からの蓄積資金を合わせて、その部分を別の産業に移すということは可能である。本書では、こうした部分移転も含めて、資本移動という用語を広義に用いる。」(テキスト190頁)

- ▶ うんと簡単化してみると、個別産業資本は、産業部門を変更するによっても、より高い純利潤率の実現を目指すということか…
□ とはいえ…

36

- ・綿布生産よりも鉄生産の方がより高い利潤率を実現

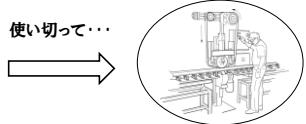
できそうだとしても……

✓ 綿布生産のために用意した固定資本を使い切ってしまわないと、全面的な は行えない…

綿布生産のための固定資本



鉄生産のための固定資本



37

- ・このように個別産業資本は、より高い利潤率を求めて競争するわけだけれど…

「個別産業資本の純利潤率を個別の利潤率」とよぶ。資本の競争は、個別の利潤率そのものを、直接、均等化させることにはならない。競争 자체は、販売過程の個別の偶然性を除去するものではないからである。しかし、粗利潤率に関しては、部門間ににおいて均等化の力がはたらく。生産過程に技術的な確定性がある以上、生産部門間で粗利潤率のレベルの乖離は、広義の資本移動を通じて解消される。諸資本の競争を通じて、生産部門間で均等化する利潤率を一般的利潤率とよぶ。一般的の利潤率は、粗利潤率のレベルについて成り立つ概念である。この一般的の利潤率を以下 R' と表記する。(テキスト190頁)

- ✓ 純利潤率と粗利潤率の構造を見比べて、いわれていることを確認してみよう

30

$$\text{純利潤率 } r = \frac{\text{純利潤}}{\text{投下總資本}} = \frac{\text{粗利潤} - \text{利息}}{\text{固定資本} + \text{流動資本} + \text{利息}}$$

- ✓ これらが存在するために、ともにフレ。
 - 個別産業資本の競争を考えても、純利潤率のレベルでの均等化を。

$$\text{粗利潤率 } R = \frac{\text{売上總利益}}{\text{固定資本} + \text{流動資本}}$$

- ✓ 技術的確定性を有する生産過程に投下される部分であるため、各産業部門で分母はブレない。
 - に対して、個別産業資本は、よりを実現しようとして競争する。
 - 粗利潤のレベルでは、を考えるこ
とができる(= :R*)

次回予告

- ・ 今回は、個別産業資本の内部構造を調べ、売り物の値段を、費用価格と利潤とに分解した
 - ✓ から を差し引くことで が求まり、個別産業資本は、より効率的により多くの純利潤を獲得しようとする
 - 生産過程の技術的確定性に基づく で、
が想定できる
 - ・ 次回は、このことの意味についてさらに考えてみる